## 学生街を歩く ③

### ◆神田神保町と明治大学
（東京都千代田区）

読売新聞記者　中西　茂

東京の神田神保町は古書店街として有名だが、一体は学生街としていくつもの顔を持つ。神田小川町にはスポーツ用品店が軒を連ね、駿河台下からJR御茶の水駅方面に向かうといまも楽器店が目立つ。そして、このエリアは中華料理店の数も多い。それは、かつて中国人留学生が数多く生活していたことと関係がある。

日清戦争（一八九四～五年）後のピーク時、我が国への中国人留学生は一万人を超えたとも言われる。その受け入れ先の一つとなったのが神田錦町の「経緯学堂」。中国・韓国からの留学生を受け入れるため、明治大学の前身、明治法律学校が一九〇四年から五年余り設けた。

当時の新聞には、毎週のように清国留学生に関する記事が出ている。そして中華街についても「数年前までは市中にて支那料理の看板を掲ぐるもの容易に見当たらざりしが、今は至る処に支那料理、支那蕎麦など云へる暖簾五歩に一亭十歩に一楼と云ふべき有様にて何れも彼等留学生を相手に可なりの収入ありと云ふ、中にも神田、牛込、本郷の如き、彼等の群集する処は頗る繁盛」と記している（一九〇六年七月一六日付読売新聞）。

若き周恩来（一八九八年―一九七六年）がこのかいわいですごしたのは一九一七年から。神田神保町の小さな公園には、周恩来が学んだことを記す東亜高等予備学校跡の碑がある。このころからの店で、現存するのは一九〇六年開業の揚子江菜館や一九一〇年開業の漢陽楼。周恩来が日記に記した漢陽楼では、いまも周恩来ゆかりの店とうたっている。

二〇一一年に創立一三〇周年を祝う明治大学では来秋、ブックフェアとともに、この「神田中華街」についての催しを企画する。ゆかりの店などが特別メニューを用意して、スタンプラリーが行われることになりそうだ。大学と中華料理店の仲介役となっているのが、「本の街・神保町を元気にする会」のメンバーでもある新世界菜館の専務、傳永興さん（五八）だ。新世

周恩来が学んだ学校の跡を示す碑

中国・紹興ゆかりの名前を冠した店も

界菜館は一九四六年開業だ。傳さんは生まれも育ちも神田である。各店が個性を競い合った時代へのこだわりは強く、ほかにも、紹興酒の本場で、周恩来の故郷でもある紹興の名店の名を冠した店など、個性的な店を新たに出店している。

現在の留学生と街のつながりはどうなのだろう。「かつては当たり前のように働いていたが、いまはうちの店にもいない。この二〇年で中国の経済発展の影響もあるのではないか」と傳専務は見る。

明大は文部科学省のグローバル30採択校。四〇〇〇人の留学生受け入れを目標としている。今年五月一日現在、明大の留学生は一〇一三人。このうち、韓国（四四七人）と中国（三九七人）で八割強を占める。

明治大学の経営学部を経て経営学研究科の修士をこの春に修了し、その目と鼻の先で「上海屋台九頭鳥（くとうちょう）」の店長を務めるのが馬謙さん（二一八）。院生時代の昨年から店長を務めている。人事管理や接客の仕方を見直し、新たなメニューを開発するなど、まさに経営学を実践中だ。

中国で大学に進んだ後、明大へ。高橋正泰教授（研究科長）の下で組織論を学んだ。以前は、中国人留学生会の中心的存在で、納谷廣美学長の訪中の際には通訳を務め、国際交流センターのTAとして、他の留学生の相談にも乗ってきた。「明治、大好きだから」と、個性を重視し、自分がやりたいことを自由に学べる学風を高く評価する。

馬さんの店は、明大の学生証があれば割引になることもあってにぎわいを見せる。中国語を学びたい日本人学生もアルバイトで働く。そして、いまも馬さんが所属したゼミ生や研究室の院生、卒業生らが集まる。その中には社会人も多い。現在のゼミにも中国、台湾、韓国の留学生が所属する。その姿は、これからの大学を先取りしているようだ。

馬さんの店に集まった高橋教授のゼミ生や院生ら